地域と連携した大学教育プログラム創設のための基礎的研究

山田健太郎・松尾晋一・山内ひさ子

Preliminary Research for the Development of Undergraduate Field Work Programs in Collaboration with Local Communities

Kentaro YAMADA, Shinichi MATSUO, Hisako YAMAUCHI

Abstract

A study on resources available in local communities in Nagasaki have for field work programs was conducted to lay the groundwork for developing a set of programs focused on enhancing communicative skills of students as well as extending and/or deepening their knowledge of the local communities. Tsushima City, Shimabara City and Hirado City were selected as the sites of the research. These three cities have plenty of resources for teaching history and tourism. They also offer diverse opportunities for students to observe tourism or experience interaction with tourists. Transportation availability will be one of the important factors in deciding the location of a program. Further research with pilot programs is needed to assess the educational value of the programs designed in collaboration with the local communities.

Keywords: field work, communication, local, tourism

はじめに

「観光論」や「観光学」という言葉をタイトルに含む書籍が近年目立って出版されているように，平成 15 年小泉内閣の時に打ち出された観光立国構想で日本政府の国策の一つに掲げられた観光振興は，いまや研究者・大学にまで広がりを見せつつある。長崎県も観光振興をその重要な事業の一つとして，平成 18 年から実施した地域限定通訳案内士や（平成 23 年度まで）平成 23 年 11 月の上海航路の復活など，さまざまな取り組みをしてきている。

一方で，地域に対する関心も近年ますます高まり，「地域学」や「地元学」という研究分野が形成されつつある。長崎県立大学が全学教育に「長崎学」を組み入れることを検討しているのも，そのような社会のニーズに応えた大学教育の改革の一環ととらえることができよう。

また平成 20 年 12 月の中教審答申「学士課程教育の構築に向けて」以降，各大学が学部教育の改革に取り組むようになり，とりわけ「学士力」の養成が大学教育改革の一つのキーワードになっている。全学教育をかつてのように特定の科目や教員に任せる時代は終わり，大学全体で「学士力」の養成をどのように行うのかがその大学の教育力を世に示す一つの指標になりつつあるよ

うである。長崎大学が全学教育の必修単位数をほぼ倍増し，大学全体で科目群（モジュール）を提供する方式に転換するビジョンを示したのも最近の例の一つといえよう（平成 24 年 3 月 24 日　長崎大学　全学教育 FD ワークショップ配布資料による)。

以上のようなことを視野に入れて，本研究では，長崎県にある公立大学の個性的な教育プログラムの創設を目指し，地域にある観光資源とその観光資源を中心に展開する地域社会の力を活用するような教育プログラム案を策定するべく，その第 1 段階として，地域の観光資源の中にある教育的な価値とそこにある教育的な環境，さらには地域によって異なる教育的内容（プログラム等）の提供状況について調査を行うこととした。ねらいの中心にあるのは，フィールド・ワーク型の授業である（フィールド・ワーク型授業の先行例については文末のリストを参照)。プログラムで育成される知識･能力の可能性については，今回の調査で得られるデータおよび知見から，次にパイロット・プログラム案を立ち上げる段階で検証を試みることとする。

教育プログラムを展開する対象は，その教育内容にもよるが，とりあえずは実社会を直接観察する型の授業展開が少ない国際交流学科に新設することを具体的な目標とする。国際交流学科の専門科目には，長崎学の科目群を含め関連する内容の科目が並んでいることも，国際交流学科の科目としての創設を出発点とする理由である。しかしながら，「学士力」の育成を視野に入れた教育プログラムであるので，国際交流学科の特色に沿った教育プログラムとするか，より広い対象のものとするかについては，今後のカリキュラム全体の改革との関連で検討されることになろう。

調査内容

本研究では，長崎県における観光資源を豊富に持つ地域・地方から，今回の調査対象として対馬，島原，平戸を選定して調査・資料収集を行い，さらに補足的に軍艦島についても情報収集した。３か所を選定した理由は，長崎県立大学に他県から入学した学生にはもちろん，県内の学生でもその出身でなければなかなか行く機会のない地域を知ることが，多くの学生にとって新たに学ぶことが多いであろうと考えたことと，それらが歴史・自然の豊富な観光資源を持ち，国際社会の歴史から日常文化まで，本学の学生，特に国際交流学科の学生にとって様々な学びを提供する場所と見込んだことが挙げられる。また交通アクセスも現実的な研修先として考える上で考慮した。五島については，分担担当者の日程調整上の問題から今回の対象リストからはずすこととなった。付け加えれば，上五島は，すでに大学のしまプロジェクトで栄養健康学科が学部教育に活用しつつあり，他学科の学生とは違う様相も多いが，重複する部分もあると考え，今回の調査の対象リストからはずすこととした。

まず調査シートを作成し，対象とする地域を評価する調査項目を決定し，担当者がその項目に沿って調査を行った。調査項目は，1) インフラ，2) 教育的リソース（歴史・文化・自然／教育的施設（博物館等）／教育的資料（パンフレット・書籍等）／教育的プログラム（地元ガイド養成プログラム等)）3) その他，4) 総合評価，である。これらの項目について地域ごとに分担して調査・資料収集を行い，その調査内容を持ち寄って合同会議を開き調査対象について検討を行った。以下がその評価の概要である。

1．対馬

対馬では，平成 23 年 11 月 9 日に歴史ガイド／トレッキングガイドのツアーを視察し，さらにそのほかの調査項目について平成 24 年 1 月 25 日に情報・資料収集を行った。国境の島とい

うこともあり，歴史・文化，そして地理的条件から，対馬固有種の動植物も多数あり，自然の分野についても観光資源が豊富である。したがって，大学教育の環境としては申し分ない場所と判断される。ただし，対馬の概要を理解するためには，１回の教育プログラムを２泊３日以上で考えることが必要と思われるため，実施時期は長期休暇中にする必要があると考えられる。また，長崎・対馬間で運行している飛行機が 39 人乗りであるため，教育プログラムはこれ以下の人数を想定しなければならない。離島であるため交通費が高く，１人当たり４万円程度必要だと思われる点，また天候不順時の対応についても考慮しておく必要がある。

現地における教育的施設としては，長崎県立対馬歴史民俗資料館　対馬野生生物保護センターなどがあり，教育的プログラムとしては，対馬観光ガイドの会やんこもが，ガイド養成として８回１コースで実施している。韓国からの団体客が多く，その観光ガイドは韓国人ガイドが随行しているが，どの程度正しい情報を持って案内をしているかはやや疑問とのことである。現地では外国人向けガイド養成の必要も感じているのが現状である。

教育的資料としては，対馬物産協会による『対馬トレッキング　ガイドブック』があり，これはインターネット上からダウンロードすることができる（http://tsushima-net.org/tourism/pamph/tsushima_trekking_guidebook.pdf）。『旅する長崎学』シリーズには『海の道Ⅱ対馬　朝鮮外交への道』がある。

対馬でガイドをされている馬渡稔治さんに意見を伺っている様子

２．島原

島原では，調査担当者が国際交流学科基礎演習の一環で島原巡検研修を行うなど，調査年度に数か所視察をしていたため，それらに基づくかたちで，平成 24 年３月 27 日に資料・情報収集を島原半島ジオパーク事務局にて行った。

島原は，キリスト日本伝来の頃から島原の乱，さらに禁教時代の雲仙地獄などキリスト教関連の歴史と深くつながっている一方で，雲仙普賢岳があることから自然災害の歴史とその自然の恵みを豊富に受けた市民の生活というように，観光資源が豊富な場所である。2009 年にユネスコから世界ジオパーク認定を受けてから，島原半島ジオパーク事務局を中心に地域振興・観光振興と教育的活動を組み合わせた活動を積極的に展開してきている。歴史・自然・生活について大学生が学ぶ上で申し分のない環境である。教育的施設としても，雲仙普賢岳災害記念館や島原城などがあり，歴史や自然災害についてかなりのまとまった知識を提供している。教育資料としては，島原半島ジオパークが『島原半島世界ジオパーク　ガイドブック』（英語・中国語・韓国語）のほか数多くのマップをテーマごとに作成しており（一部インターネットよりダウンロード可能），ホームページもきわめて充実しておりほとんどの基礎知識をここで得ることができる。また火山

との推進協議会は『普賢岳いまむかし』という冊子を発行している。ほかに『島原半島ジオパークをひと筆書きで一周する』や『南島原歴史遺産』のようにコンパクトに情報がまとめられた書籍がある。また 2012 年 3 月より実施されはじめた島原半島ジオパーク検定に合わせて『島原半島ジオパーク検定　公式テキスト』も刊行されている。

島原半島では，これまで小浜，雲仙，島原などそれぞれの小さな地域ごとにボランティアガイドが活動をしてきている。それらを結びつけることと，全体をガイドできる人材を養成することを主眼に，島原半島ジオパーク事務局では平成 22 年よりボランティアガイド養成講座を行っている。ガイド初級は 90 分を 7 回が 1 コースで，５回以上出席で修了証を発行している。初級修了者を対象に中級講座は 14 回行っている。現時点では外国語によるガイド養成は行っていないが，将来に向けて学生が外国語でのボランティアガイドをするということについては前向きに考えている。それへのひとつの布石として，長崎県の国際交流事業の一つとして島原半島ジオパーク事務局が 3 月 14 日から 15 日にかけて実施した長崎県内留学生対象のジオツアーに，長崎県立大学国際交流学科の学生４名が中国語・韓国語のサポートとして参加した。今回は英語圏からの留学生がいなかったため英語のサポートでの学生参加はなかったが，英語も含めた今後の協力関係を発展させることを検討中である。

島原半島ジオパークでは５つのテーマに分けたコースを紹介しており，研修プログラムを組み立てる際には大いに活用できる。ただし，いずれのコースにしても移動に公共交通機関を利用することは難しいため，大学バス・貸切バス等の利用が不可欠である。雲仙災害記念館までは，最寄りの駅まで JR を利用すれば片道約３時間半，約 2000 円で到着する。しかしながら，その後の移動を考えるとやはり最初から貸切バスで移動するのが効率的である。

陸路の移動であるため，天候の影響は離島への研修に比べればはるかに小さい。

３．平戸

平戸においては，調査担当者が国際交流学科１年生対象のしまプロジェクトで平戸を調査年度９月に訪れていたため，平成 24 年 3 月 30 日に NPO 公益法人平戸観光ウェルカムガイド浦部知之氏と面談し，資料・情報収集を行った。

平戸は，キリスト伝来の歴史から，中国との交易と国際交流，オランダをはじめとする西洋の国との貿易など，日本の海外との交流史上きわめて歴史的な価値の高い地域であるとともに，松浦家代々の伝統と捕鯨の歴史さらには隠れキリシタンの史跡と歴史的な観光資源がきわめて豊富にある。また海に囲まれた豊かな自然もこの地域の観光的魅力である。これまで，平戸観光協会や平戸観光ウェルカムガイドを中心に観光振興の努力が積み重ねてきており，2012 年 9 月には平戸オランダ商館（倉庫）が復元されて博物館として公開され，あらたな方向が模索されつつあるようである。大学生が歴史・自然・文化について学ぶ上で申し分のない環境といえよう。教育施設としては，平戸オランダ商館のほかに，松浦史料博物館，平戸城が主なものとしてあり，さらに生月には平戸市生月町博物館島の館があるほか，平戸切支丹資料館などもある。教育資料としては，平戸オランダ商館のパンフレットや，松浦史料博物館編纂の『史都平戸　年表と史談』や *Hirado: Historical Notes and Chronology*，平戸市史編さん委員会による『大航海時代の冒険者たち』,『蘭英商館と平戸藩』,『平戸はじめて物語』,『平戸ふるさと物語』，さらには『旅する長崎学』シリーズに『海の道Ⅳ平戸･松浦　西の都への道』や『歴史の道Ⅰ平戸街道ウォーキング』がある。また平戸観光ウェルカムガイド発行の『平戸検定公式テキストブック　平戸の文化と自然』もある。

平戸観光ウェルカムガイド協会では，ベテラン・ガイドによるツアーを市民対象に定期的に企

画し，それに参加して関心をもった市民にウェルカムガイドとして登録してもらい，ガイドステーションでの案内やベテラン・ガイドの補助などを経験しながら，ガイドができるようになっていく養成プロセスをとっている。一方で市民の平戸についての関心を高めることを主な目的として，平戸検定を年に１回行っている。検定は初級・中級・上級とあり，受験者は自分でレベルを選べる（複数選択可）。平戸検定の事前講習会として年に２時間のものを 10 回行っている。将来的には上級合格者のなかからウェルカムガイドが育つことを目指している。外国人向けガイドの養成については，現時点では特に考えていないようである。将来的に外国人のガイドが増えれば具体的な対策を考えるようになると思われる。平戸の観光資源を活用する教育としては，浦部氏が提案した日本語でガイドをする経験をさせるプログラムが興味深い。主眼とするのはコミュニケーション能力の養成であり，その能力を自ら身に着けるための課題として観光案内を与えるというものである。課題の最終的な達成目標として，ガイドにふさわしいコミュニケーションをゲストと成立させるというものを置き，その目標に向けての示唆をベテラン・ガイドあるいは地元の人たちからもらいながら，自分にとって相手に伝えたいことは何かを選び，それを効果的に伝えるにはどのようにしたらよいかを考え，さらに現実に伝えるために必要な練習を積む，というものである。期間はどの程度である程度の効果が見込めるのか，あるいは適正な評価項目はどのようなものとすべきか，などについてはパイロット・プログラムを走らせて参加学生からのフィード・バックを集めることが，しっかりとした教育プログラムに仕上げる上で必要になるが，課題解決型の教育プログラムとして，またコミュニケーション能力を育成するという点において今後検討する意義は大いにあるといえよう。

平戸へは，自家用車等では約２時間で到着するが，公共交通機関（JR とバス）を利用すると約４時間半かかる（運賃約 2800 円）。さらに，松浦史料博物館と平戸オランダ商館，平戸城は隣接しているため徒歩で移動が可能ではあるが，平戸切支丹資料館，平戸市生月町博物館島の館や平戸に多数ある教会へ公共交通機関で移動するのは困難である。プログラムの目的にもよるが，大学バス・貸切バス等での移動の方が計画が立てやすいと判断される。大学からは陸路での移動であるので，離島での実施に比べれば，ここでのプログラム実施は天候の影響を受けにくい。

まとめ

今回の調査では，対馬，島原，平戸を対象に，それぞれの地域にある観光資源とその観光に関連した教育資源について調査を行った。３つの地域ともに豊富な観光資源とそれを学習するための教育的資源も整っており，大学教育を展開する環境として申し分ないと判断された。

今回の研究で主眼としている地域の観光資源を活用したフィールド・ワーク型の教育プログラムのねらいには，２つの方向性があると考える。ひとつは「歴史・文化・自然・生活の総合的な学び」であり，もう一つは「課題解決力・コミュニケーション能力育成」である。国際交流学科の教育の柱の一つである語学力に関連付けて，さらにその上に「実践的な語学力養成」をねらいとするものを展開することも可能である。まずは先の２つの方向性を基礎とし，そのどちらに重点をおいたものとするかをこの教育プログラムを具体化する上で明確にする必要があると思われる。最終的なプログラム案では必ずしも一律にする必要がないかもしれないが，実施の効果を検証する上でも，それぞれがどのようなねらいで設計されたものかをはっきりとしておく必要がある。そして当然それはカリキュラム全体における「学士力」育成とも関係してくる問題である。また，その方向性によってどの地域がそれを受け入れる環境と体制が最も整っているかを判断することが必要になろう。

離島での教育プログラムの実施は，天候の影響を受けやすく，また経費がかなりかかる。教育プログラムとして展開する際には経費についての支援なども考慮する必要があろう。しまプロジェクトとどのような関係に位置づけられるかも検討する必要がある。経費についていえば，平戸，島原についてもある程度同様である。学生の経費負担とプログラム安定の点からいえば，市内近郊の方が実施しやすいのは事実である。その学習目標に何を据えるかにもよるが，具体的なパイロット・プログラムを作成する段階では，長崎市内のものも用意して比較検討すると良いのではないかと考える。

今回の研究では調査対象に長崎市近郊を含まなかったが，当然ながら長崎市近郊にも豊富な観光資源があり，むしろこの地域のほうが集中している。そしてそれに関連する教育的施設も数多くある。例えば軍艦島コンシエルジュは，外国人観光客に補助的なボランティア・スタッフとして参加する大学生を平成 24 年 4 月から募集をし始め，本学学生も参加している。今後これらの主催者との連携で市内のプログラムを検討することの可能性は大きいと考える。

また長崎市は「游学のまち長崎」推進アクションプランの一環として，長崎国際観光コンベンション協会主催の「さるくガイド研修」に長崎市内の大学生参加させる「学生さるくガイド研修」を平成 24 年 8 月 27 日から 9 月 7 日にかけて行い，本学からの参加者 10 名を含む長崎の大学生 13 名が参加した。今後継続的な「学生さるくガイド研修」の実施と共に，最終的な外国語で案内できる能力を習得させることを視野に入れながら大学と提携して単位化することも検討中である。これに応える本大学でのカリキュラム体制の準備が至急望まれる。

今回の調査では，対馬，島原，平戸に対象を限定せざるを得なかった。同じ視点・同じ調査項目で壱岐，上五島，下五島についても調査をすれば，さらに教育プログラム展開の可能性について広く知ることができると考えるが，これは今後の課題の一つである。

付記：　本研究は長崎県立大学平成 23 年度学長裁量研究費の交付を受けて行われた。

参考文献

井口貢編著　『観光文化と地元学』古今書院　2011 年
地域学研究会編　『はじめての地域学』ミネルヴァ書房　2011 年
柳原邦光，光多長温，家中茂，仲野誠編著　『地域学入門』ミネルヴァ書房　2011 年
中央教育審議会　『学士課程教育の教育に向けて（答申)』　平成 20 年 12 月 24 日
日本コミュニケーション学会編　『現代日本のコミュニケーション研究　日本コミュニケーション学の足跡と展望』　三修社　2011 年
茶谷幸治　『まち歩きが観光を変える　長崎さるく博プロデューサー・ノート』　学芸出版社，2008 年

付録

フィードワーク型授業　先行例

山形大学　エリアキャンパスもがみ
http://www.yamagata-u.ac.jp/gakumu/yam/mogami/index.html

同志社大学　プロジェクト科目
http://www.doshisha.ac.jp/students/curriculum/pbl/
滋賀県立大学　地域学副専攻化による学士力向上プログラム
http://gp-portal.jp/src/ippan/shoukaiPage.cfm?id=1921
北海道大学　博物館を舞台とした体験型全人教育の推進
http://gp-portal.jp/src/ippan/shoukaiPage.cfm?id=684
長崎女子短期大学　長崎食育学を活かした食文化伝承と情報発信
http://gp-portal.jp/src/ippan/shoukaiPage.cfm?id=1938
県立広島大学　学士力向上を図るフィールド科学の創設
http://gp-portal.jp/src/ippan/shoukaiPage.cfm?id=746
明治大学　地域・産学連携による自主・自立型実践教育
http://gp-portal.jp/src/ippan/shoukaiPage.cfm?id=766
京都文教大学　文化コーディネータ養成プログラム
http://gp-portal.jp/src/ippan/shoukaiPage.cfm?id=783
立命館大学　地域社会問題を学生創造力で解く学びの仕組み
http://gp-portal.jp/src/ippan/shoukaiPage.cfm?id=788
大阪成蹊大学　地域のニーズに応える学生参加事業の展開
http://gp-portal.jp/src/ippan/shoukaiPage.cfm?id=791

付録

調査票の記入例

地域と連携した大学教育プログラム創設のための基礎的研究

調 査 日：1月25日

調査対象：対馬市北部

調査項目

1．インフラ	現地までの交通手段（便数、所要時間、料金等）
	長崎市→福岡空港→対馬空港　6便　30分　往復運賃（片道分）12,600円
	現地での移動交通手段（便数、所要時間、料金等）
	レンタカー（1300cc）8時間　6,300円
	宿泊施設（1箇所の受け入れ可能人数など）
2．教育的リソース	歴史・文化・自然
	歴史については由緒ある神社があり、国境のしまとしての歴史を知ることのできる史蹟が多くあり、砲台など近代遺産も点在している。文化については、対馬特有の石を使用した家屋、小屋群が点在し、対州そば作りを体験できる施設もある。自然については、九州本土と異なる落葉広葉樹の山々が連なっており、中部地方以北の山間部を思わせる。また、希少野生生物も生息しており、特にツシマヤマネコは全国的にも知られている。
	教育的施設（博物館等）
	対馬野生保護センター、各地域の歴史民俗資料館、そば道場「あがたの里」、舟志の森自然学校ほか
	教育的資料（パンフレット・書籍等）
	『旅する長崎学12　海の道Ⅱ　対馬』（長崎文献社　2009年）ほか。
	教育的プログラム（地元ガイド養成プログラム等）
3．総合評価	歴史・文化・自然を組み合わせた教育プログラムを作ることは可能。学生もあきることなく、様々なことを吸収してくれる場所。注意点は、移動手段。レンタカーを利用、もしくはバスをチャーターするしかないが、国道であっても道幅が狭く、ペーパードライバーの学生などは少々苦労することが考えられる。